

長岡京市文化財調査報告書

第45冊

2003

長岡京市教育委員会

編 集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

長岡市文化財調査報告書

第45冊

2003

長岡市教育委員会

編集 財團法人長岡市埋蔵文化財センター

序 文

「長岡京発掘の父」といわれる故中山修一先生の生家の一角に、昨年9月に中山修一記念館を開館いたしました。この記念館は、ご遺族の好意で寄付していただいた土地と建物を整備したものであります。館内は先生の業績や長岡京などに関する解説パネル、遺愛品などを展示した和室2室と、先生の蔵書を収藏した書庫で構成されています。長岡京の発信基地、長岡京はじめ郷土史の学習活動の拠点施設として多くの方々に利用していただいているところであります。

さて、ここに刊行します報告書は、国庫補助事業として平成14年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。神足三丁目では長岡京跡西市の所在確認、久貝二丁目では恵解山古墳周濠の範囲確認としてそれぞれ調査を実施しました。当初予想した調査成果は得ることができませんでしたが、こうした点での調査の積み重ねが、やがて面として捉えられ、本市の歴史解明の貴重な資料となるものと確信するものであります。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡市埋蔵文化財センターなど関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成15年3月

長岡市教育委員会

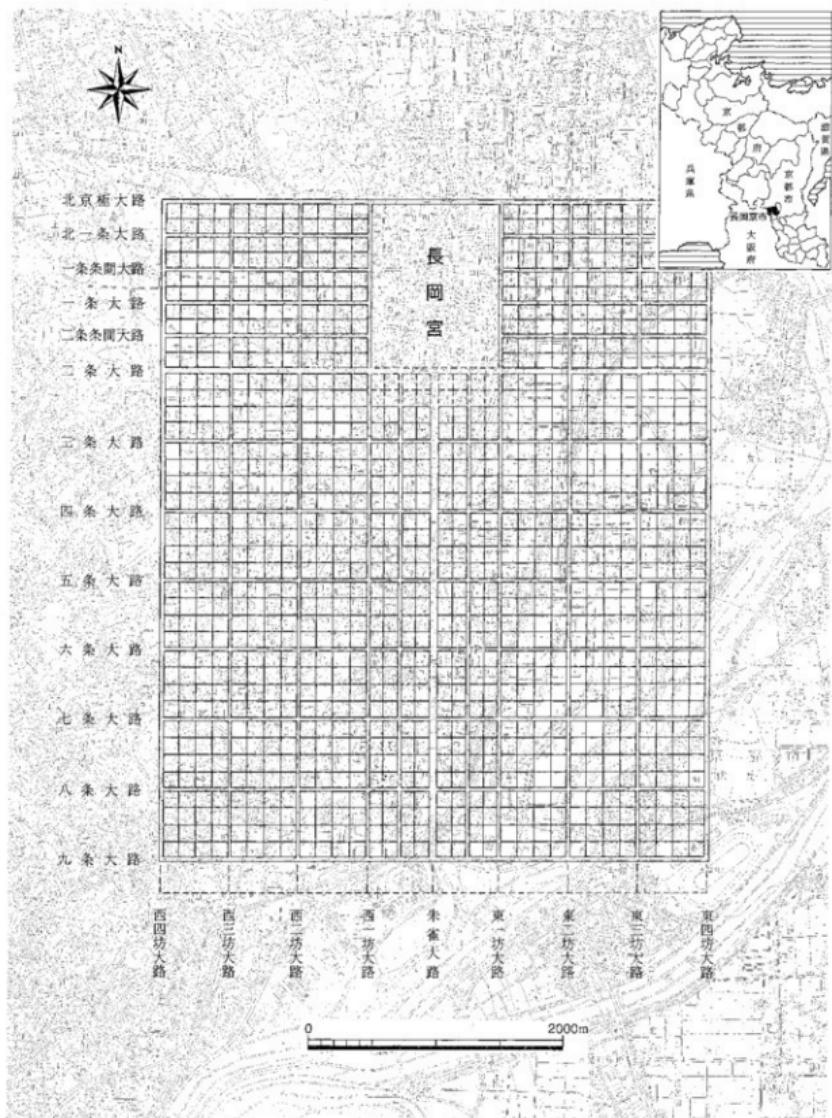
教育長 芦田富男

凡 例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成14年度に国庫補助事業として実施した発掘および整理調査の概要報告である。調査対象地は付表1、その位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、右京城、左京城ごとに通算したものである。調査地区名は、京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』の旧字名を基にした地区割に従った。
3. 長岡京の条坊復原は、山中章『古代条坊制論』『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。
4. 本書で使用する地形分類については、とくに断らない限り「長岡京市地形分類図」「長岡京市史 資料編一」（1991年）に従った。
5. 長岡京跡の調査で使用している正式な遺構番号は、調査次数+番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため、調査次数を省略している場合がある。
6. 本書挿図の土層名で（ ）を付して示した記号は、『新版標準土色帖』（1997年版）のJIS表記法による土色である。
7. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。
8. 遺物写真的撮影については、杉本和樹氏（西大寺フォト）に依頼し、一部は小田桐淳が撮影したものを使用した。
9. 各報告の執筆者は、各章のはじめに記した。
10. 本書の編集は、財長岡京市埋蔵文化財センターが行った。

付表1 本書報告調査一覧表

| 調査次数 | 地区名 | 所 在 地 | 現地調査期間 | 調査面積 | 備 考 |
|-----------------|----------|----------------------|--------------------------------|-------------------|-----------------------|
| 長岡京跡右京 第728次 | 7ANIFC-8 | 長岡京市 今里更ノ町19 | 2001年12月26日 ～ 2002年1月15日 | 62m ² | 今里遺跡 |
| 長岡京跡右京 第733次 | 7ANMKI-8 | 長岡京市 東神足二丁目10-1 | 2002年2月12日 ～ 2002年2月22日 | 27m ² | 神足遺跡 神足城跡 勝龍寺城跡 |
| 長岡京跡右京 第743次 | 7ANQMK-3 | 長岡京市 久貝二丁目305,812 | 2002年7月29日 ～ 2002年8月14日 | 196m ² | 南栗ヶ塚遺跡 |
| 長岡京跡右京 第747次 | 7ANMHK-5 | 長岡京市 神足三丁目311-3 | 2002年9月4日 ～ 2002年10月7日 | 202m ² | 間田遺跡 |
| 長岡京跡右京 第765次 | 7ANQUD-7 | 長岡京市 久貝二丁目216 | 2003年2月10日 ～ 2003年3月18日 | 336m ² | 南栗ヶ塚遺跡 |
| 長岡京跡左京 第484次 | 7ANMST-8 | 長岡京市 神足芝本8-9-10 | 2003年2月27日 ～ 2003年3月28日 | 48m ² | 雲宮遺跡 芝本遺跡 |



第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000)

本文 目 次

| | |
|---|----|
| 第1章 長岡京跡右京第728次調査概要 | 1 |
| 1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物 | |
| 5 まとめ | |
| 第2章 長岡京跡右京第733次調査概要 | 7 |
| 1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物 | |
| 5 まとめ | |
| 第3章 長岡京跡右京第743次調査概要 | 13 |
| 1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物 | |
| 5 まとめ | |
| 第4章 長岡京跡右京第747次調査概要 | 19 |
| 1 はじめに 2 調査経過 3 検出遺構 4 出土遺物 | |
| 5 まとめ | |
| 第5章 長岡京跡右京第765次調査概要 | 23 |
| 1 はじめに 2 調査概要 | |
| 第6章 長岡京跡左京第484次調査概要 | 24 |
| 1 はじめに 2 調査概要 | |

図 版 目 次

長岡京跡右京第728次調査

- 図版 1 (1) 調査地全景（北から）
(2) 1トレンチ全景（北から）
図版 2 (1) 1トレンチ断面（西から）
(2) 溝S D01Cの土層（西から）
(3) 溝S D01Aの土層（西から）
図版 3 (1) 2トレンチ全景（北から）
(2) 2トレンチ断面（北西から）
図版 4 (1) 出土遺物－1
(2) 出土遺物－2

長岡京跡右京第733次調査

- 図版 5 調査地全景（南から）
図版 6 (1) 調査地遠景（西から）
(2) 調査地から勝龍寺城本丸、天王山を望む（北東から）
図版 7 (1) 北トレンチ全景（西から）
(2) 北トレンチと土壙（南西から）
(3) 南トレンチ全景（西から）
(4) 南トレンチと土壙（南西から）
図版 8 (1) 南トレンチ溝S D01（北から）
(2) 出土遺物

長岡京跡右京第743次調査

- 図版 9 (1) 西調査区全景（南西から）
(2) 東調査区全景（北東から）
図版 10 (1) 落ち込みS X05（南から）
(2) 土坑S K04（南東から）
(3) 野井戸S E01（北西から）
図版 11 出土遺物

長岡京跡右京第747次調査

- 図版 12 (1) 北調査区全景（南から）
(2) 北調査区全景（北から）
(3) 南調査区全景（南から）
(4) 土坑S K04・溝S D05（南西から）

長岡京跡右京第765次調査

- 図版 13 (1) 調査区全景（北西から）
(2) 拡張区全景（西から）

挿 図 目 次

| | |
|--|-----|
| 第1図 本書報告調査地位置図 (1/40000) | iii |
| 長岡京跡右京第728次調査 | |
| 第2図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 1 |
| 第3図 1 トレンチ平・断面図 (1/100) | 2 |
| 第4図 2 トレンチ平・断面図 (1/100) | 3 |
| 第5図 出土遺物実測図 (1/4) | 4 |
| 第6図 周辺調査地と条坊 (1/600) | 6 |
| 長岡京跡右京第733次調査 | |
| 第7図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 7 |
| 第8図 土壠・空堀測量図 (1/300) | 9 |
| 第9図 出土遺物実測図 (1/2・1/4) | 10 |
| 第10図 検出遺構図・土層図 (1/100) | 11 |
| 長岡京跡右京第743次調査 | |
| 第11図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 13 |
| 第12図 調査前風景（西から） | 14 |
| 第13図 調査作業風景（北から） | 14 |
| 第14図 調査地周辺図 (1/600) | 15 |
| 第15図 検出遺構図・土層図 (1/100) | 16 |
| 第16図 野井戸 S E 01・土坑 S K04断面図 (1/20) | 17 |
| 第17図 出土遺物実測図 (1/4) | 18 |
| 長岡京跡右京第747次調査 | |
| 第18図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 19 |
| 第19図 調査地土層図 (1/100) | 20 |
| 第20図 検出遺構図 (1/200) | 21 |
| 長岡京跡右京第765次調査 | |
| 第21図 発掘調査地位置図 (1/5000) | 23 |

長岡京跡左京第484次調査

第22図 発掘調査地位置図 (1/5000) 24

付 表 目 次

付表 1 本書報告調査一覧表 ii

付表 2 報告書抄録 25

第1章 長岡京跡右京第728次（7ANIFC-8地区）調査概要

— 長岡京跡右京三条二坊十六町、今里遺跡 —

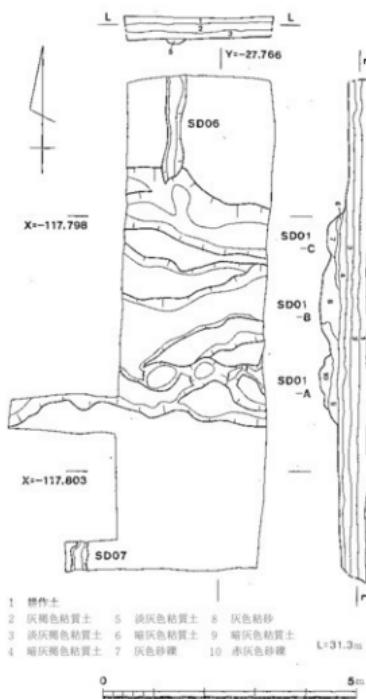
1 はじめに

- 1 本報告は、2001年12月26日から2002年1月15日まで、長岡京市今里更ノ町18において実施した長岡京跡右京第728次調査の整理報告である。
 - 2 現地調査は、平成13年度の国庫補助事業として、長岡京の条坊に関する資料を得ることを目的として実施したもので、二条大路南側溝および西二坊坊間西小路西側溝が確認されている。現地調査の概要は、長岡京市文化財調査報告書第43冊で既に報告しているが、今回の報告をもって正報告とする。
 - 3 整理作業は、平成14年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。整理作業は同センター調査係長の小田桐淳が担当した。
 - 4 本報告の編集および執筆・遺物写真撮影は小田桐が行った。



第2図 発掘調査地位置図(1/5000)

2 検出遺構



第3図 1トレーニング平・断面図(1/100)

2 調査経過

調査地は小畠川右岸の氾濫原Ⅰに立地しており、現在の小畠川から100mほど南西にあたる。右京第723次調査の原因となる宅地開発が計画されるまでは水田として利用されていた。

調査地周辺では、右京第386次調査で西二坊坊間西小路東側溝や二条大路南側溝が確認されたのを始めとして、右京第723次調査⁽²⁾でも二条大路南側溝が検出されている。今回の調査は、これら二回の調査地の間にトレーニングを設定し、二条大路南側溝の確認と、二条大路にとりつく西二坊坊間西小路西側溝の状況を確認すること、以前の調査で確認されていた、東西方向の宅地内溝と斜行する溝、それと西二坊坊間西小路との関係を明らかにすることを目的として実施した。

3 検出遺構

調査トレーニングは2カ所設定し、北側の1トレーニングでは、二条大路南側溝と西二坊坊間西小路

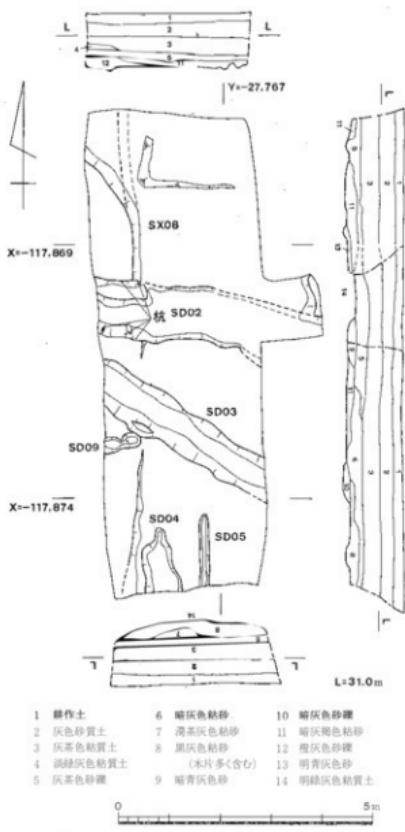
西側溝との合流部の調査、南の2トレーニングでは、西二坊坊間西小路と右京第386次調査検出の町内溝との関係を追求する調査として開始した。

1 トレーニング

水田耕作土の下は二層の粘質土が堆積しており、これらの層を除去すると、G.L.-40cmで二条大路南側溝の北肩が検出された。南肩は、北肩から南に堆積している暗灰褐色粘質土（第3図第4層）を除去した段階で検出された。暗灰褐色粘質土は中世遺物を少量含む中世遺物包含層である。遺構検出面は地山層で、この面より二条大路南側溝 S D01と、二条大路の路面に掘られ、南側溝につながる溝 S D06、南北方向の溝 S D07が検出された。検出面の標高は北で31.1m、南では31mを測る。

S D01は検出幅4.3~4.7mを測るが、掘形と埋土からA~Cの変遷を経て掘り直されていることが判明した。埋土の状況はいずれも洪水を想起させるような砂疊層によって下層は埋まっており、上層には粘質土層が堆積している状況であった。

S D06の埋土は淡灰色粘質土で、深さは10cm程である。遺物は出土していない。S D01の南には延びないことと、S D01の北肩部分がS D06との接点でえぐれたようになっていることから、



第4図 2 トレンチ平・断面図 (1/100)

S D01に合流する二条大路路面に掘られた溝と考えられる。

S D07は西拡張区で検出された浅い溝であるが、埋土から1片だけ須恵器壺Gの破片が出土しているのみである。さらにS D01の北肩部でトレンチを拡張したが、ここではS D07の延長を検出することはできなかった。

2 トレンチ

第4図第5層以下の砂礫層ないし粘砂層が長岡京期の遺物を包含する層である。この砂礫層は洪水による堆積物と考えられる。第5層下面で、トレンチ西端部では明緑灰色粘質土の地山層となった。この面から東西溝S D02が検出されている。地山面は東で5~20cmの段差をもって低くなり(S X08)、以東へ緩く傾斜している。S X08はほぼ南北方向に延びている。なお第4図第12・13層は長岡京期の遺物を含まない堆積層である。

地山層ないし長岡京期の遺構のベース層からは斜行する溝S D03などが検出された。これらの遺構が検出された標高は30.6mから30.3mの高さである。

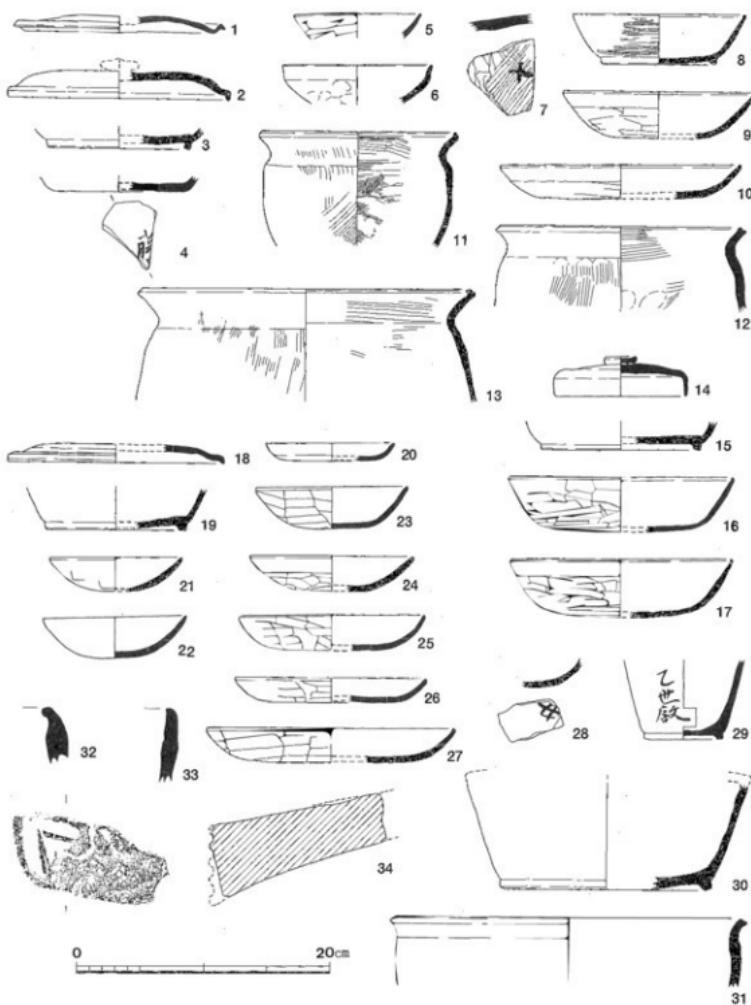
S D02は幅1m、深さ0.2m程の規模で、砂層によって埋没している。トレンチ西端部では両肩に5本の杭列が認められた。これは右京第723次調査で検出されている杭列の続きである。この溝はトレンチ東端部でやや南にカーブしている。

S D03は幅0.8~0.9m、深さ0.15m程の斜行する溝で、振れ角は北で西に58° 30' 程を測る。S X08の底面が北西から南東に向かって緩やかに傾斜していることから、S D03は地形の傾斜に沿って開削されているものと考えられる。

検出面の高さおよび切り込み層の違いから、S D03はS D02に先行する時期と考えられるが、出土する遺物はいずれからも長岡京期の土器が出土している。

S D04はトレンチの南端で検出された溝で、幅0.7m、深さ0.05mと浅い溝である。S X08に沿って延びるが、検出長1.7m程で途切れている。埋土は段を覆っている黒灰色粘砂層と同じである。S D05は幅0.2mの細い溝で、埋土や途切れる状況等はS D04と同様である。

4 出土遺物



1~4-SD01 5~13-SD02 14~17-SD03 18~34-2 レンチ砂疊層出土

第5図 出土遺物実測図 (1/4)

4 出土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが長岡京期の遺物である。遺構の中にはもとより、2トレンチ第5~11層も全て長岡京期の遺物包含層である。しかし破片が多く、接合する資料は少ない。いずれの遺物も砂疊層や砂層が多い中で、磨耗しているものはない。

1 トレンチの出土遺物は S D01出土のものがほとんどであり（第5図1～4）、量は少ない。2の須恵器杯B蓋はS D01Aの南肩斜面にへばりついていたものである。4の杯Aは、明灰色をした軟質の須恵器であるが、底部に「藤」の墨書が認められる。破片のため文字の全容および文字数は不明である。

2 トレンチ出土遺物では、5～13がS D02出土のものである。7は赤灰色を呈した胎土の土師器高杯の杯部で、裏側の杯部との接合部付近に墨書が認められる。14～17はS D03出土、18以降は2トレンチの堆積層出土である。22の土師器椀A底部外面にも墨痕が認められるが、文字については不明である。28は須恵器杯Aで底部外面に墨書があり、「女」とも読めるが定かではない。29は椀Bと考えられるもので、外面に「乙世殿」と墨書されている。建物、施設等を意味するものとも考えられる。他に重画文軒平瓦（34）が1点出土している。

5 まとめ

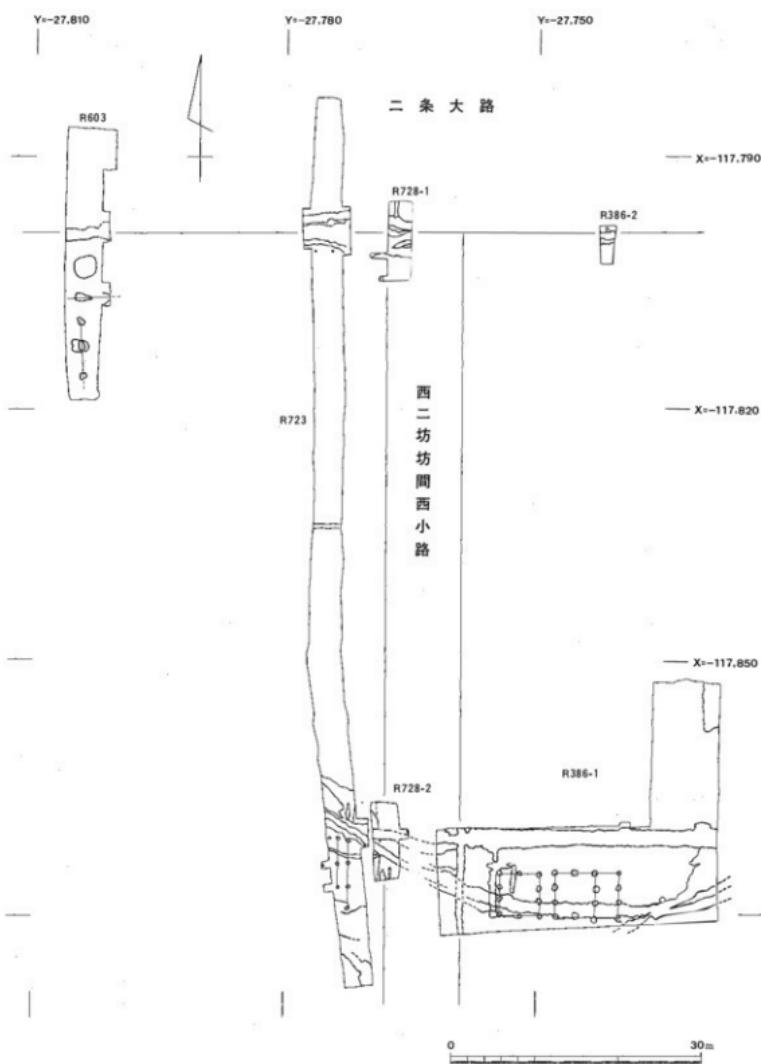
今回の調査では各トレンチで想定した成果が得られた。1トレンチの二条大路南側溝では、A～C三時期の掘り直しが確認され、順次路面幅が縮小する傾向が認められた。埋土からは砂礫で埋没するような強い水流が度数あったことが想定され、この状況は2トレンチで確認された数層の長岡京期の遺物を包含する堆積層が砂や礫を主体としているのと符合する。この様な状況から、当地が度々洪水にみまわれながらも宅地として利用されていたことがいえよう。

二条大路南側溝はこれまでに60mほどの間で4回の調査を行ったことになるが、一番西での調査である右京第603次調査（第6図）では再掘削の痕跡は確認されていない。このことから、洪水によって土砂をかぶるのはさほど広い範囲ではなかったといえる。

2トレンチではS X08が検出され、この段に沿ってS D04が検出された。S D04の心座標はY = -27,768.2であり、右京第386次調査検出の西二坊坊間西小路東側溝（Y = -27,758.7）との距離9.5mとなる。このことから、S D04が条坊側溝に類するものである可能性は高く、またS X08以東が道路として区画されていると考えることもできよう。この場合、路面幅は10mとなる。S X08の上端はY = -27,768.7であり、1トレンチのS D07の西肩の座標（Y = -27,768.9）と近い数値となる。1トレンチと2トレンチとの間が70m離れていることを考慮すると、S D07も西側溝の痕跡である可能性は否定できない。

S D02・03は西二坊坊間西小路を挟んで十六町から九町に流れる溝である。これらの溝は西二坊坊間西小路東側溝がしっかりと掘られているにも関わらず、路面を横断して東方へも排水している。先行するS D03が地形に即した方向に掘られていることから、南へ排水する東側溝だけでは不足で、さらに東へも排水する必要性があったことが想定されよう。

最後に、今回の調査で出土した墨書土器や、九町で出土している木筒、十六町で出土している「政所」墨書土器などは、二条大路に面した宅地の様相を示しているといえよう。しかしながら具体的な遺構は検出されておらず、今後の調査が待たれる。



第6図 周辺調査地と条坊 (1/600)

注1) 山本輝雄「右京第386次調査略報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年

2) 原 秀樹「右京第723次調査概報」『長岡京市センター年報』平成13年度 2003年

3) 中島皆夫「右京第603次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

第2章 長岡京跡右京第733次（7ANMKI-8地区）調査概要

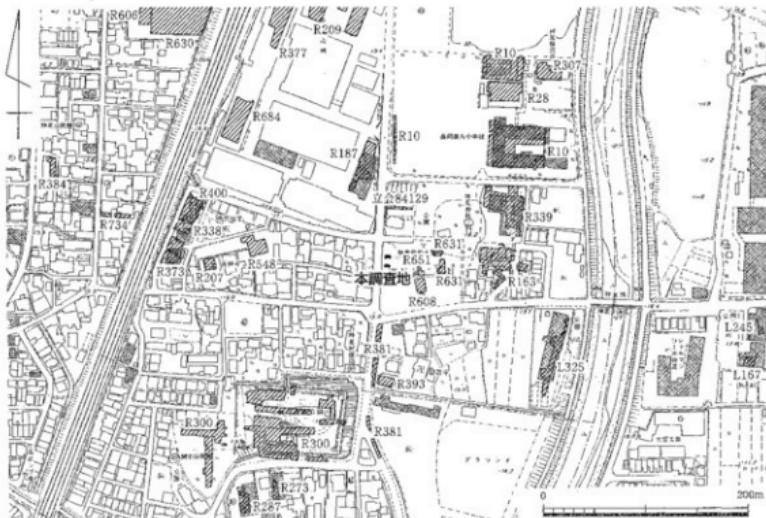
—長岡京跡右京七条一坊七町、神足遺跡、神足城跡、勝龍寺城跡—

1はじめに

- 1 本報告は、2002年2月12日から2002年2月22日まで、京都府長岡京市東神足二丁目10-1において実施した長岡京跡右京第733次調査の整理報告である。調査は2カ所に調査トレンチを設定し、総調査面積は27m²である。
- 2 本調査は、長岡京跡、神足遺跡および室町時代の神足城跡、室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡に関係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター主査の木村泰彦が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、神足神社、神足自治会、近隣地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は木村が行った。

2調査経過

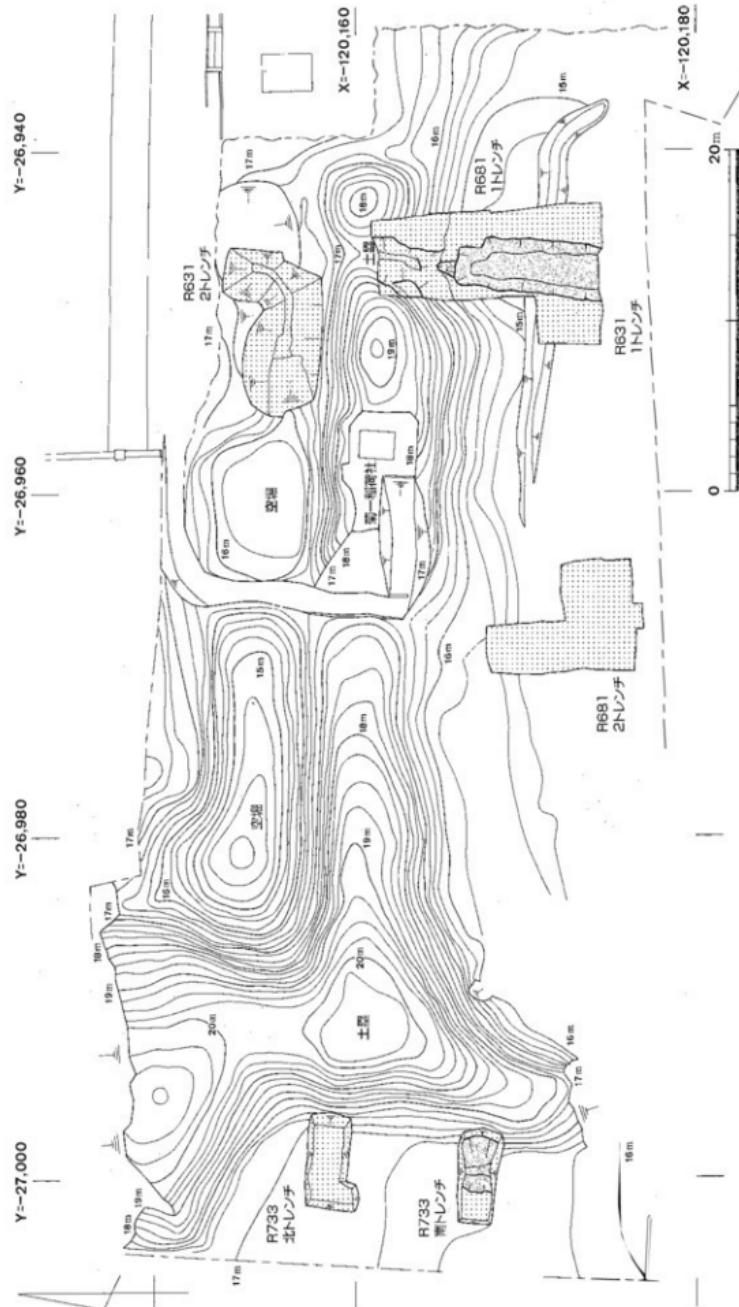
今回の調査地は、JR長岡京駅の南東約400mの竹林の一角に位置している。この竹林は勝龍



第7図 発掘調査地位置図(1/5000)

寺城の土星の一部にあたり、周辺が宅地化される中で、北東にある延喜式内社とされる神足神社の森と共に緑の景観を提供している。当地は長岡京では右京七条一坊七町にあたるほか、弥生時代、古墳時代を中心とする神足遺跡の南部域、さらに室町時代の神足城、そして室町時代から桃山時代にかけての勝龍寺城跡にもあたっている。室町時代の神足城は、西岡地域を代表する国人である神足氏の居館で、古文書に「こうたにしろ」と記された中心部が当地周辺に推定されている。また細川藤孝により元亀2（1571）年に大改修された勝龍寺城では、この神足城が「神足屋敷」として城下に組み入れられており、現在も神足神社を中心として土星・堀が残されている。細川氏の勝龍寺城は結構を持つ城としては土星や堀が比較的よく保存されているため、城郭研究上貴重な遺跡として有名である。このうち本丸と沼田丸に関しては広範囲に発掘調査が行われ、多くの重要な成果が得られている。その後は都市公園として整備がなされ、現在は市民の憩いの場として親しまれている。一方本丸の北東約200mに残された土星・堀に対しては、1979～1980年に京都考古学研究会によって最初に本格的な調査⁽¹⁾が行われた。土星・堀を中心に地形測量が行われ、初めて勝龍寺城に関するデータが呈示された。合わせてこれらの保存、活用に関しての提言もなされている。しかし4年後の1984年には宅地造成工事によって神足神社参道より東側の堀と土星はすべて削平されることとなる。この時に行われた右京第163次調査⁽²⁾では、土星・堀に関しての考古学的データが得られると共に、土星の一部が古墳の墳丘を利用していることも明らかとなった。その後残された土星・堀の保存活用を図るべく、1999年と2000年に国庫補助事業として右京第631・681次調査⁽³⁾が行われ、土星の南に南北方向の堀が存在することが判明した。この堀は細川氏勝龍寺城の絵図には描かれておらず、これまでまったく知られていなかったものである。堀は土星の裾で途切れていることから、同時期に存在していたことは間違いない、以前の神足城の施設が取り込まれた可能性が考えられている。またこれらの南で行われた、事務所建設に伴う右京第608次調査では、上層で細川氏によって改修された勝龍寺城関連の遺構が、下層では神足城に関連するとみられる土坑・井戸などが確認されている。

今回の調査はこの残された土星の西端部に接して、事務所建設が計画されたことによる。この部分は、東西方向に伸びた土星が直角に折れ曲がり、南北方向に向きを変える横矢掛かり付近にあたる。以前は民家の納屋が建てられていたが、移転に伴い整地され、現状ではアスファルト舗装されて駐車場として利用されている。駐車場は北から南に緩やかに傾斜しており、標高は駐車場の北側で17.0m、南側で16.0mである。今回計画された建物は面積も小さく、建設場所も既存の駐車場部分であるため、長岡京市教育委員会では土星等に大きく影響を及ぼすものでは無いと判断された。しかしながら上述した当地の重要性に鑑み、平成13年度国庫補助事業として調査を実施することとなった。ただ期間・予算ともに広範囲の調査を行えるものではないため、土星の裾及び平坦部分の遺構確認を主たる目的とした。さらに以前の調査で未実測であった土星部分の測量も行うこととした。調査は、南北方向に伸びる土星の西裾付近に直行する東西方向のトレントチを2本平行して設定し、それぞれ北トレントチ、南トレントチとした。調査は重機によりアスファルト・盛土を除去し、以下は人力によって掘り下げた。調査の結果、南トレントチにおいて土星の



第8図 土壌・空堀測量図 (1/300)

据とそれに接して掘られた南北方向の溝を検出した。

3 検出遺構

北トレンチ 南北2.5m、東西5.5mに設定した矩形トレンチである。層序は大きく西側の民家解体時のもの（第3～5層）と東側の土壠からの流入土（第7～10層）に分けられる。民家解体時の層は何れも多量の瓦礫を含んでおり、江戸時代から現代までのものが見られる。その下、西半部には部分的に民家建設以前の竹藪客土があり、それらを除去すると黄褐色の段丘礫の一部が現れる。この面での標高はトレンチ西側で15.7m、東側で15.9mである。この面では遺構は検出されず、何れも民家解体時の搅乱だけであった。また層序でも述べた如く、トレンチ内には土壠の据はかかっておらず、流入土を確認したのみであった。

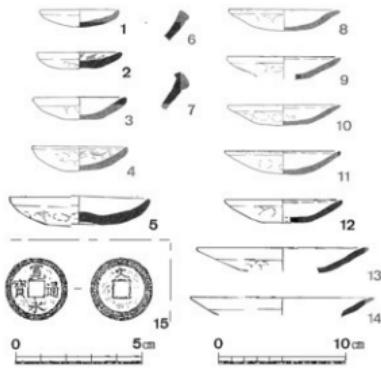
南トレンチ 南北2.0m、東西5.5mに設定したが、東側で溝SD01が検出されたため、法面確保のためわずかに南北を広く取っている。地山面までの基本層序は北トレンチとはほぼ同一であり、多量の瓦礫を含む民家解体時の層で占められる。地山面の標高は約15.7mである。溝SD01以外では西側に民家解体時に伴う搅乱が存在したのみである。

溝SD01 土壠据に接して掘られた南北方向の溝で、今回検出された唯一の遺構である。溝は堅い段丘礫を掘り込んでおり、土壠の据にあるため規模の測定が困難な点はあるが、幅約2.5～3m、検出面からの深さは1mで、底部での標高は南側が14.7m、北側が14.75mとわずかではあるが南が低くなっている。延長部にあたる北トレンチではこの溝は検出されていないことから、途中で途切れるかあるいは西に折れ曲がっているものと見られる。埋土は8層で、約0.1m前後の薄い堆積が基本となる。遺物は土器器皿などが少量出土している。またトレンチ東壁では土壠据の一部が確認され、土壠基底部付近で標高約15.6mの地山面に約0.1mの礫混り土と粘土（第19～24層）を積み重ねている状況が看取された。ただ破壊されないことが前提であったため、断ち割りは行わず表面観察にとどめている。

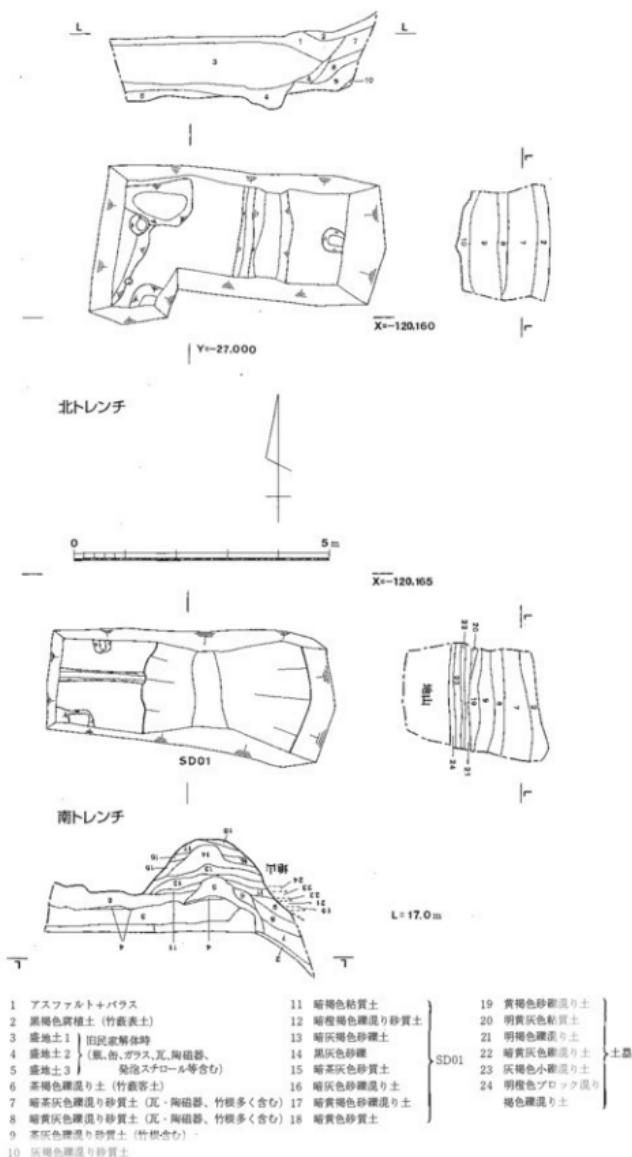
4 出土遺物

今回の調査ではコンテナにして2箱の遺物が出土しているが、そのほとんどが民家解体時の整地土出土の近・現代のもので占められている。内容は桟瓦が最も多く、次いでガラス、陶器片、碍子などがある。

1と5は北トレンチの搅乱堆積土内から出土したもので、1は口径6.3cm、器高1.4cm、5は口径11.1cm、器高2.2cmを測る。2～4は南トレンチの溝SD01上層第11・12層から出土したものである。口径6.7～7.6cm、器高



第9図 出土遺物実測図 (1/2 · 1/4)



第10図 検出遺構図・土層図 (1/100)

1.3~2.0cmで、2と4には内面にハケメが残されている。これらは17世紀前半頃と見られ、時期的には永井氏によって北側に新たに築かれた勝龍寺城が存在した時期にあたるものである。

溝S-D01の下層第14~16層からは東播系と見られる須恵器鉢の小片（6・7）や、土師器皿（8~14）が出土している。土師器皿は口径8.7~9.2cm、器高1.6~18cmの小形のもの（8~12）と口径14cm前後に復元される大形のもの（13・14）がある。このうち8・10・11は口縁端部に灯火器使用痕が残されている。何れも16世紀後半頃のものと見られ、細川氏の勝龍寺城の時期にあたるものであろう。これら以外には図示できないが瓦器椀片、長岡京期と見られる須恵器杯B片も出土している。寛永通宝（15）は南トレンド搅乱土内から出土したものである。

5 まとめ

今回の調査では、非常に限られた面積ではあったものの土壘に並行する溝を検出することができた。また前回の調査で未実測であった部分の実測を行い、現存する土壘部分に関しては図を完成させることができたのは勝龍寺城の保存・活用を図る上で貴重な資料となろう。

今回検出された溝は、出土した遺物から見て細川氏による勝龍寺城改修に伴うものとみて間違いないとみられるが、幅約3m、深さ1mと小規模で空堀を挟んだ土壘の内側にあることから堀のような防御施設とは考え難い。わずかな調査で全容が明らかとなっていないため断言はできないものの、現段階では区画溝のようなものとみるのが妥当と思われる。以前に行われた右京第631・681次調査^⑨で検出された土壘に直行して掘られた南北方向の溝は、深さは2mと異なるものの、幅はほぼ同じであり、同様の性格を有していた可能性がある。すなわち現在残る土壘の南側にこのような溝が何条か存在し、それによって区画された何らかの施設が存在した可能性が考えられよう。当調査地の東30mで行われた右京第608次調査^⑩では、石仏や一石五輪塔を転用した同時期の井戸が検出されていることから居住施設があったことは確実と見られる。現在のところそれを特定はできないが、勝龍寺城の全容を考える上で貴重な成果と言えよう。今後の調査・研究の進展に期するものである。

注1) 岩崎 誠「勝龍寺城」『長岡京市センター報告書』第6集 1991年

2) 『勝龍寺城跡』京文懇だよりNo11 京都の文化遺産を守る懇談会 1984年

3) 岩崎 誠「長岡京跡右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第15冊 1985年

岩崎 誠「長岡京跡右京第163次調査概要」『長岡京市報告書』第17冊 1986年

4) 原 秀樹「長岡京跡右京第631次調査概要」『長岡京市報告書』第41冊 2000年

5) 原 秀樹「長岡京跡右京第681次調査概要」『長岡京市報告書』第42冊 2001年

6) 注4・5に同じ。

7) 原 秀樹「右京第608次調査概報」『長岡京市センター年報』平成10年度 2000年

第3章 長岡京跡右京第743次（7ANQMK-3地区）調査概要

—長岡京跡右京八条一坊十四町、南栗ヶ塚遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2002年7月29日から8月14日まで、長岡京市久貝二丁目305、812において実施した長岡京跡右京八条一坊十四町および南栗ヶ塚遺跡の発掘調査に関するもので、調査面積は196m²である。
- 2 調査は、国史跡に指定されている恵解山古墳の範囲を確認することに主眼をおき、合わせて長岡京跡および南栗ヶ塚遺跡に関係する資料を得ることを目的とした。
- 3 発掘調査は、平成14年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた財長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調査は、同センター総括主査の山本輝雄が担当した。
- 4 調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ久貝自治会、久貝農家組合、長岡第八小学校などから種々のご理解とご協力を賜った。また、当センターの理事である都出比呂志氏には、現地を視察していただいた。
- 5 本報告の編集および執筆は、山本が行った。



第11図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

JR京都線の長岡京駅から南南西の方向約1kmに所在する恵解山古墳は、古墳時代中期に築造された全長約120mの規模を有する乙調地域最大の前方後円墳である。古墳は、過去に発掘調査が3回実施されており、盛土を施して墳丘を構築していること、葺石と円筒、朝顔形、家形、蓋形などの埴輪を伴うこと、墳丘の周間に盾形の周濠を巡らしていること、後円部に安山岩や結晶片岩を用いた竪穴式石室が、また前方部には武器類を主体とする大量の鉄製品を副葬した埋納施設を有することなどが判明し、多大な成果が得られている。そして、墳丘は周濠を含めて1981(昭和56)年に国の史跡として、鉄製武器類を主体とする出土遺物も2001(平成13)年に京都府の文化財に指定されている。

今回の調査は、恵解山古墳の範囲を確認することに主眼をおくとともに、周辺部に南栗ヶ塚古墳のような小古墳や埴輪円筒棺など古墳に付設された埋葬施設が存在するか否か、さらには長岡京跡の西一坊大路および旧石器時代から中世までの複合遺跡である南栗ヶ塚遺跡に關係する遺構、遺物の有無を確認する目的で行ったものである。

調査地は、古墳の南側周濠の推定外堤に接する2枚の水田で、地形的にみると標高15m前後の氾濫原Ⅰ上に立地している。調査では、農道を挟んだ東西の水田にそれぞれ調査区を設定し、7月29日から重機による掘削を開始した。翌30日からは、作業員を動員して遺構を検出するための精査に着手したところ、両調査区とも耕作土直下が地表面であり、検出した遺構、遺物は極めて乏しいことなどが判明した。そして、遺構の掘り下げが終了した8月7日に全景写真を撮影し、8・9の両日に断ち割り作業と実測図の作成を行った。週明けの12日からは、埋め戻し作業と発掘用資材などの撤収を行い、14日には現地での作業をすべて終了した。



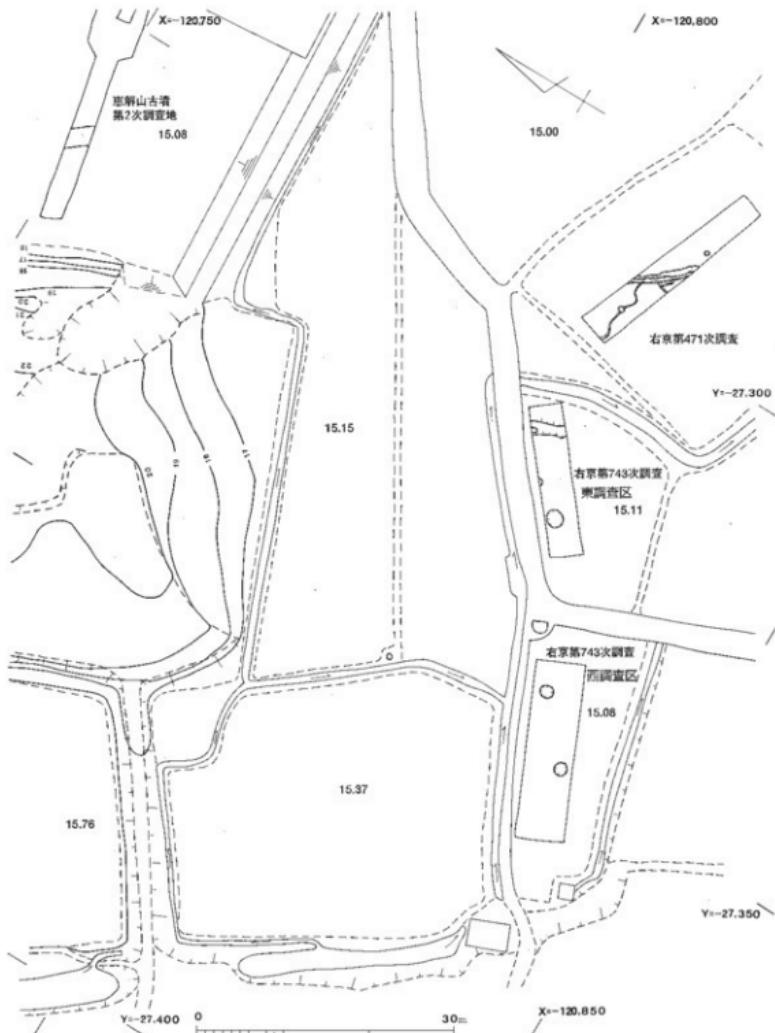
第12図 調査前風景（西から）



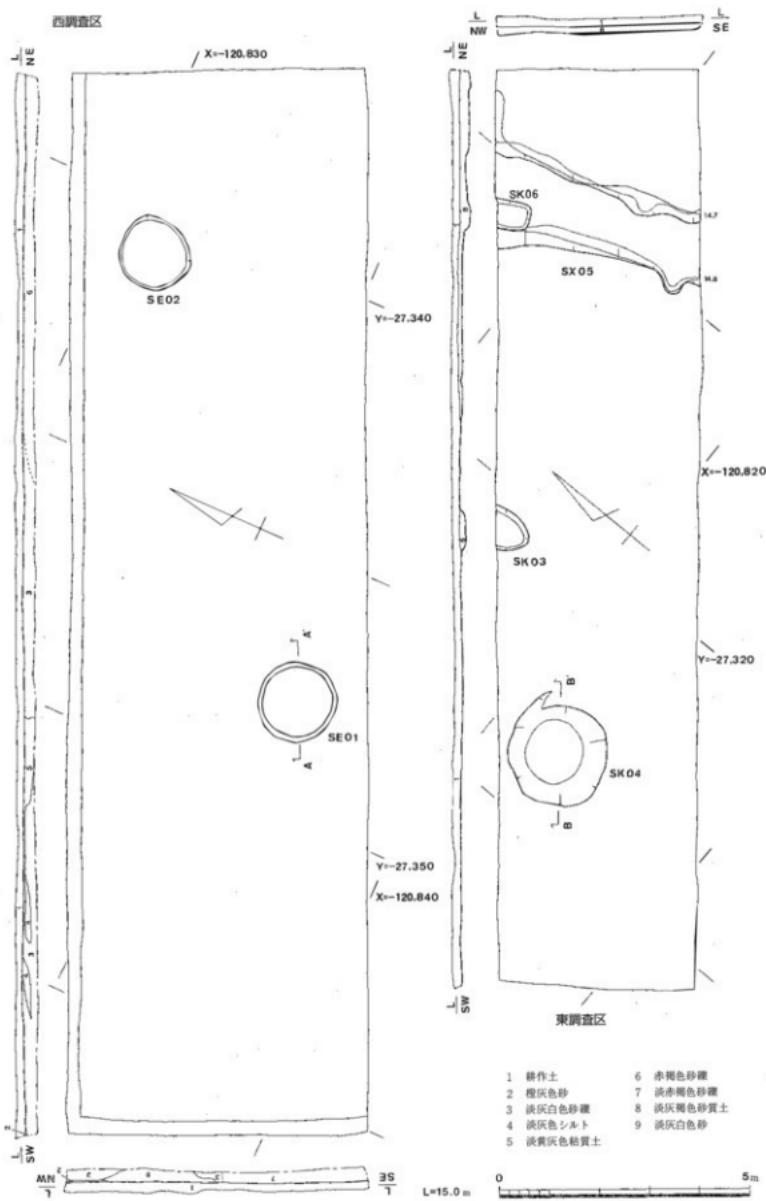
第13図 調査作業風景（北から）

3 検出遺構

西調査区 久貝二丁目305の水田に設定した調査区で、東西約21m、南北約6m、調査面積は124m²である。この調査区では、厚さ約0.2mほどある耕作土の直下が地山であった。地山を構成



第14図 調査地周辺図 (1/600)



第15図 検出遺構図・土層図 (1/100)

する土層は、赤褐色～淡灰白色を呈する硬質の砂礫層が主体で、部分的に淡黄灰色粘質土を認めることができた。地山面は、おおむね平坦に削平を受けており、上面での標高は14.9m前後ある。検出した遺構は、野井戸2基の他に、暗褐色系を呈する不整形な土坑状の輪郭を2、3確認したが、底部と地山との識別が不明瞭で、出土遺物もないと判断した。

野井戸S E01 調査区の西部で検出したが、深さが0.1mほどしかなく、遺存状況は不良であった。径約1.6mほどの円形掘形内に、竹を編んだ径約1.4mほどの井戸側がわずかに残存しており、埋土中には漆喰の残骸とみられる黄色砂が混在していた。遺物は、土師器、須恵器の小片が少量出土したにすぎない。

野井戸S E02 調査区の東部で確認した径約1.4mの円形掘形で、深さが0.05mほどしかなく、須恵器の細片が1点出土したのみである。

東調査区 久貝二丁目812の水田に設定した調査区で、東西約18m、南北約4m、調査面積は72m²である。この調査区においても、西調査区の場合と同様に、耕作土直下が地山であった。地山を構成する土層は、淡黄白色を呈する硬質の砂礫層が主体で、地山面はおおむね平坦に削平を受けており、上面での標高は14.9m前後ある。

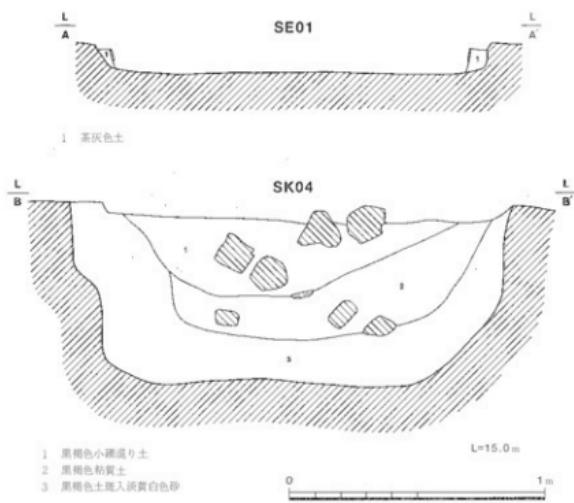
土坑S K03 調査区の北辺中央部で確認した不整形な土坑で、東西0.75m以上、南北0.9m以上、深さ0.1mほどの規模である。埋土は淡灰褐色砂質土で、遺物は何も出土しなかった。

土坑S K04 調査区の西部で確認した楕円形を呈する土坑である。径約1.7mで、掘り鉢状に深さ0.7mほど掘り窪まれており、埋土は大きく3層に分けられた。埋土中には両拳大ほどの礫が20数個ほど埋没し、瓦器碗、瓦器三足羽釜、土師器皿、青磁碗などの遺物が出土している。

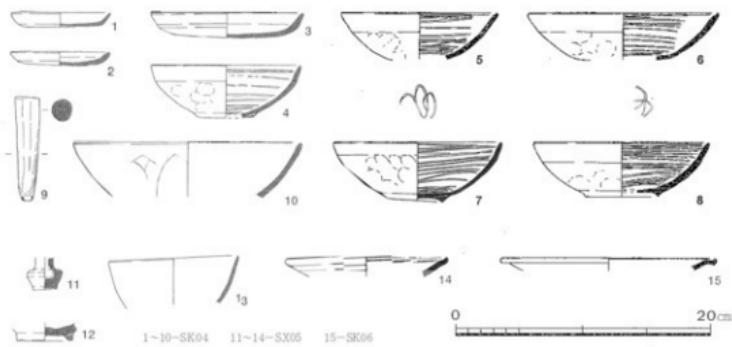
落ち込みS X05 調

査区の東部で確認した。南西から北東へ緩やかに2段に落ち込んでおり、深さは約0.2mほどある。埋土は淡灰褐色砂質土1層で、土師器、須恵器、陶器器などの中破片が少量出土している。

土坑S K06 落ち込みS X05内にある不整形な土坑で、埋土はS X05と同じ。陶器片が1点出土。



第16図 野井戸S E01、土坑S K04断面図 (1/20)



第17図 出土遺物実測図 (1/4)

4 出土 遺 物

今回の調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、瓦器、青磁、陶磁器、自然木など各種のものがあるが、その数量はコンテナに1箱程度しかなく、図示できたものも少数であった。

土坑SK04出土遺物 土師器皿、瓦器椀、瓦器三足羽釜、青磁碗、木片などが出土している。土師器の皿には、口径7.8cm、器高1.1cmの小型品（1・2）と、口径12cm、器高2cmの中型品（3）がある。小型品は胎土が緻密で、淡灰褐色を呈するのに対して、中型品は胎土に砂粒を比較的多く含み、淡橙褐色を呈する。瓦器椀（4～8）は、口縁端部内面に沈線を施すもの（5・6・8）と、丸くおさめるもの（4・7）があり、底部には低くて断面三角形を呈する高台を貼り付けている。内面のみに粗雑なヘラミガキが認められ、7・8の見込みには螺旋状の暗文を施している。全形がわかる4は口径11.6cm、器高4.1cm、7は口径13.2cm、器高4.7cm、8は口径13.7cm、器高4.2cmある。青磁碗（10）は、口径19.5cm、器高4.3cm以上あり、外面に厚みのある花弁を表現している。素地は灰色を呈し、暗緑色系の釉を施しているが、貫入は認められない。

落ち込みSX05出土遺物 土師器、須恵器、陶磁器などが出土している。11は土師器のミニチュア壺で、口縁部を欠失するが、底径は2cmある。12は須恵器壺Mの底部片で、貼り付けの高台径は4.4cmある。13は磁器碗、14は陶器皿の破片である。

土坑SK06出土遺物 陶器の皿（15）が1点出土しており、口径は16.6cmある。

5 ま と め

以上みてきたように、今回の調査では、恵解山古墳の周濠がこれ以上南側に広がらないことが明らかになるとともに、古墳時代の遺構、遺物、さらにはその存在が推定された西一坊大路についても確認することはできなかった。ただし、中世の土坑を1基ではあるが確認できたことは、南栗ヶ塚遺跡の中世集落を考える上に貴重な成果といえよう。

第4章 長岡京跡右京第747次調査（7ANMHK-5地区）調査概要

—長岡京跡右京六条二坊四町、開田遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2002年9月4日から2002年10月7日まで、京都府長岡京市神足三丁目311-3において実施した長岡京跡右京第747次調査の報告書である。
- 2 本調査は、長岡京跡西市に關係する考古学的な資料を得ることを目的として実施した。調査総面積は約202m²であった。
- 3 発掘調査は、平成14年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、財長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター主査の中島皆夫が担当した。
- 4 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者をはじめ、周辺地域の方々に種々のご協力とご理解を賜った。
- 5 本報告の執筆・編集は中島が行った。

2 調査経過

調査地はJR長岡京駅の南西約400m、市立神足小学校の南に位置している。周辺は宅地化が進んでいるが、部分的ながらも水田や畠地などの緑地が残っている。



第18図 発掘調査地位置図 (1/5000)

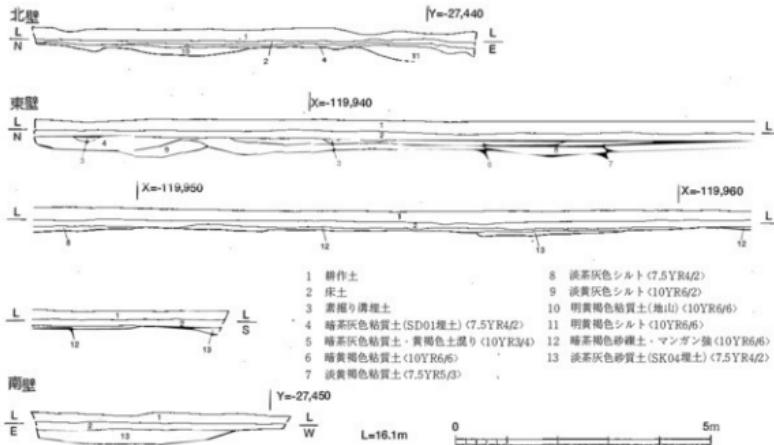
調査地周辺は標高16m前後の氾濫原Ⅰに立地する。調査地の西約50mには犬川が南流しているが、この小規模河川の東側は比較的安定した立地環境といえる。

当地から北西に犬川を越えた右京六条二坊六町の周辺では右京第688次調査などが行われ、多量の木簡や「市」墨書土器など長岡京西市との関連を想定できる資料が得られている。また、当地の北では右京第77・314・365次調査が行われ、西一坊大路、六条条間小路、建物など長岡京の宅地に関する成果が得られている。南側の地域は調査例が少ないが、当地でも六条大路など長岡京に関連する遺構の確認が期待されていた。

調査では発掘作業の終了後に耕作地へ復旧する必要があったため、耕作土と床土以下に分けて重機掘削を行い埋戻しに備える必要があった。さらに、あげ土置場などに充分な広さを確保するため、調査は対象地を南北の調査区に分け順次行うこととした。発掘調査は平成14（2002）年9月4日より対象地の北半部に南北約18m、幅6~8mの調査区を設定して行った。北調査区の掘削作業および記録作業が終了した後、南側に南北14m、幅約5mの調査区を設定した。南調査区における作業が終了し、対象地全域の埋戻しおよび復旧を終えたのは10月7日である。なお、調査区の中心は第VI座標系のY=-27,446、X=-119,949に位置する。

3 検出遺構

基本層序（第19図） 対象地は調査着手前まで耕地であったため、表面は耕作土（第1層）で覆われていた。耕作土の厚さは0.2m程度、床土（第2層）が0.15m程度を測り、床土の下には黄褐色粘質土ないしシルト（第10・11層）の地山が現れる。調査区北端の地表面の標高は16.4m、地山面は16mであった。調査区南半は床土が北半に比べて薄く、床土の下には厚さ0.05~0.15mの茶褐色砂礫土（第12層）が認められる。



第19図 調査地土層図 (1/100)

調査では土坑2基、柵1条、溝1条、流路1条を確認している(第20図)。いずれの遺構も出土遺物が少なく、詳細な時期が明らかでない。

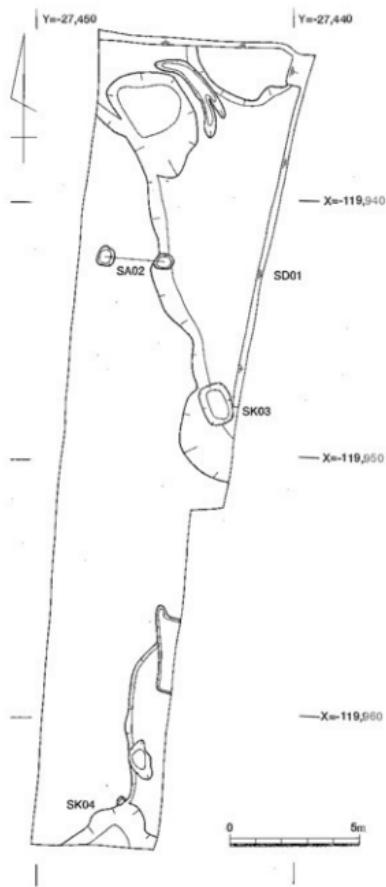
土坑SK04 調査区南端で確認した不整形な土坑で、調査区から南へさらに続いているため全容は明らかにできなかった。土坑の深さは約0.3m前後を測るが、平面規模や形状は定かでない。土坑埋土の最下層からは染付茶碗の破片が出土しており、近世の遺構と考えられる。

溝SD05 前述の土坑SK04から北へ延びる浅い溝状の遺構である。埋土には遺物が含まれていなかったが、土坑SK04の埋土と非常に似通っていることから近世以降のものと考えた。また、溝は耕作に関連するものと推測される。

柵SA02 調査区の北半中央部で柱穴2基を確認した。いずれの柱穴も隅円方形の平面形を呈しており、一辺は0.6m前後を測る。深さは西側の柱穴が0.4m、東側が0.2mであった。2基の柱穴はほぼ東西方向に並ぶが、僅かに西で北へ振っている。重複関係から前述の流路SD01より新しい時期と判断したが、埋土に遺物が含まれておらず所属時期の検討は行えなかった。

土坑SK03 調査区のはば中央部で検出した長方形の土坑である。土坑の長軸方向は真北から西へ30°程度振っている。規模は長軸方向の長さが1.6m、幅約1mで、深さは0.15m前後と浅いものであった。土坑埋土には遺物が含まれていなかったが、流路SD01との重複関係から長岡京期以降のものと考えられる。

流路SD01 調査区の北半部で北西から南東方向へ流れる流路の西肩を検出した。しかし、東肩が確認されておらず、流路の規模や方向などは明らかでない。流路は深さ0.3~0.7mで、埋土には茶灰色粘質土(第19図第5層)、黄褐色粘質土(第6・7層)、茶灰色シルト(第8層)、黄灰色シルト(第9層)が認められた。出土遺物は少ないが、流路の底部付近からは長岡京期前後の須恵器が出土している。



第20図 検出遺構図(1/200)

4 出土遺物

本調査の出土遺物には、近世の土師器・陶磁器、中世の土師器・瓦器、長岡京期前後の土師器・須恵器がある。しかし、出土量は整理箱にして1箱程度と少なく、また、いずれも小片であり図示し得るものはなかった。

5 まとめ

今回の調査では調査目標であった長岡京跡の六条大路、西市に関する情報は得られなかった。これまでに六条大路は左京第210・⁽⁶⁾230・⁽⁷⁾269・⁽⁸⁾288・⁽⁹⁾297・⁽¹⁰⁾302・⁽¹¹⁾390次調査地点で検出されており、北側溝のX座標値はX = -119,952 (左京第269次) ~ X = -119,956.12 (左京第288次)、南側溝はX = -119,978.64 (左京第302次) ~ X = -119,980.74 (左京第288次)に求められる。本調査区では左京城における確認例から、少なくとも北側溝が検出されるものと予想していただけに、未検出という結果は残念であった。しかし、六条大路を検出できなかったことは、調査地における削平の程度や後世の大川の影響など、立地環境の一端を示すものと考えられる。今後の周辺調査によって条坊施行状況や宅地内の様子、そして、後世の土地改変の程度などが明らかにされることを期待したい。

- 注1) 日下雅義・植村善博「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史」資料編一 1991年
- 2) 中島皆夫「右京第688次調査略報」「長岡京市センター年報」平成12年度 2002年
- 3) 山本輝雄・木村泰彦「長岡京跡右京第77次調査概要」「長岡京市報告書」第9冊 1982年
- 4) 小田桐 淳「右京第314次調査略報」「長岡京市センター年報」昭和63年度 1990年
- 5) 小田桐 淳他「長岡京跡右京六条二坊二町・三町の調査」「長岡京市センター報告書」第10集 1997年
- 6) 小田桐 淳「左京第210次調査略報」「長岡京市センター年報」昭和63年度 1990年
- 7) 小田桐 淳「左京第230次調査略報」「長岡京市センター年報」平成元年度 1991年
- 8) 岩崎 誠「左京第269次調査略報」「長岡京市センター年報」平成3年度 1993年
- 9) 長宗第一・木下保明他「水垂遺跡・長岡京左京六・七条三坊」「京都市報告書」第17冊 1998年
- 10) 小田桐 淳「左京第297次調査略報」「長岡京市センター年報」平成4年度 1994年
- 11) 山本輝雄「左京第302次調査略報」「長岡京市センター年報」平成5年度 1995年
- 12) 原 秀樹「左京第390次調査略報」「長岡京市センター年報」平成8年度 1998年

第5章 長岡京跡右京第765次（7ANQUD-7地区）調査概要

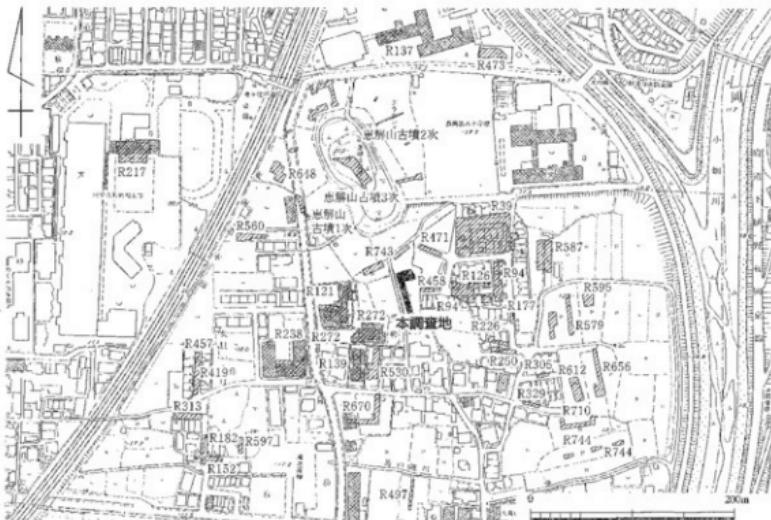
—長岡京跡右京八条一坊十四町、南栗ヶ塚遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2003年2月10日から3月18日まで、長岡京市久貝二丁目216において実施した長岡京跡右京八条一坊十四町および南栗ヶ塚遺跡の発掘調査に関するもので、調査面積は336m²である。
- 2 調査は、国史跡に指定されている恵解山古墳の範囲を確認することに主眼をおき、合わせて長岡京跡および南栗ヶ塚遺跡に関する資料を得ることを目的とした。
- 3 発掘調柶は、平成14年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた（財）長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調柶は、同センター総括主査の山本輝雄が担当した。

2 調柶概要

今回の調柶では、近世以降の井戸や溝のほか、中世から長岡京期の遺物を包含する堆積層などを確認することができた。その詳細については、遺物整理をまつて次年度に改めて報告することにしたい。



第21図 発掘調柶位置図 (1/5000)

第6章 長岡京跡左京第484次（7ANMST-8地区）調査概要

—長岡京跡左京六条一坊五町、雲宮遺跡、芝本遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2003年2月27日から2003年3月28日まで、長岡京市神足芝本8・9・10において実施した長岡京跡左京第484次調査の概要報告である。
- 2 本調査は、長岡京跡左京第102・479次調査で検出された疎敷遺構の範囲確認を目的として実施した。調査総面積は48m²であった。
- 3 発掘調査は、平成14年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター主査の中島皆夫が担当した。
- 4 本報告の執筆・編集は中島が行った。

2 調査概要

調査では左京第102・479次調査で検出されていた疎敷遺構を確認することができた。疎敷は調査区の北東部で途切れており、この部分では疎が南北方向に面を揃えて据え置かれていた。疎敷遺構の西限を確認できたことは本調査の重要な成果といえるだろう。疎敷の構築時期は中世以前と考えられるが、詳細な時期や性格については整理作業の結果を待って判断する必要がある。



付表2 報告書抄録

| ふりがな | ながおかきょうしへんかざいちょうさほうこくしょ | | | | | | | |
|----------------------------------|-----------------------------|--------------|----------------------------|-------------------------|-----------------------|----------------------|-------------------|------|
| 書名 | 長岡京市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 長岡京市文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第45冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | 小田橋淳、木村泰彦、山本輝雄、中島哲夫 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 長岡京跡 今里遺跡 | 長岡京市今里 更ノ町19 | 26209 | 107 32 | 34°56'14" 135°41'46" | / | 20011226 20020115 | 62m ² | 遺跡確認 |
| 長岡京跡 神足遺跡 神足城跡 近世勝龍寺城跡 | 長岡京市東神足 一丁目10-1 | 26209 | 107 83 82 84-1 | 34°55'00" 135°59'59" | / | 20020212 20020222 | 27m ² | 遺跡確認 |
| 長岡京跡 南栗ヶ塚遺跡 | 長岡京市久貞 二丁目305、812 | 26209 | 107 103 | 34°54'37" 135°42'3" | / | 20020729 20020814 | 196m ² | 遺跡確認 |
| 長岡京跡 開田遺跡 | 長岡京市神足 三丁目311-3 | 26209 | 107 80 | 34°55' 6" 135°41'58" | / | 20020904 20021007 | 202m ² | 遺跡確認 |
| 長岡京跡 南栗ヶ塚遺跡 | 長岡京市久貞 二丁目216 | 26209 | 107 103 | 34°54'36" 135°42' 4" | / | 20030210 20030318 | 336m ² | 遺跡確認 |
| 長岡京跡 善宮遺跡 芝本遺跡 | 長岡京市神足芝本 8・9・10 | 26209 | 107 88 87 | 34°55' 8" 135°42'31" | / | 20030227 20030328 | 48m ² | 遺跡確認 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 長岡京跡（右京第728次） | 都城 | 長岡京期 | 二条大路南側溝 西二坊坊間西小路 西側溝 | | 土師器、須恵器、墨書き 土器、軒平瓦 | | | |
| 今里遺跡 | 集落 | | | | | | | |
| 長岡京跡（右京第733次） 神足城跡 中世勝龍寺城跡 | 都城 城館 城館 | 長岡京期 中世 | 溝 | | 須恵器 土師器、瓦器 土師器 | | | |
| 長岡京跡（右京第743次） 南栗ヶ塚遺跡 | 都城 集落 | 長岡京期 鎌倉時代 | 土坑 | | 土師器、瓦器、青磁 | | | |
| 長岡京跡（右京第747次） 開田遺跡 | 都城 集落 | 長岡京期 中世 | 旧流路 | | 土師器、須恵器 土師器、瓦器、陶磁器 | | | |
| 長岡京跡（右京第765次） 南栗ヶ塚遺跡 | 都城 集落 | 長岡京期 近世以降 | 落ち込み 井戸、溝 | | 土師器、須恵器、瓦 土師器、陶磁器 | | | |
| 長岡京跡（左京第484次） 善宮遺跡 芝本遺跡 | 都城 集落 散布地 | 長岡京期 中世 | 蹀躞遺構 | | 土師器、瓦器 | | | |

図 版

長岡京跡右京第728次調査

図版一



(1) 調査地全景（北から）



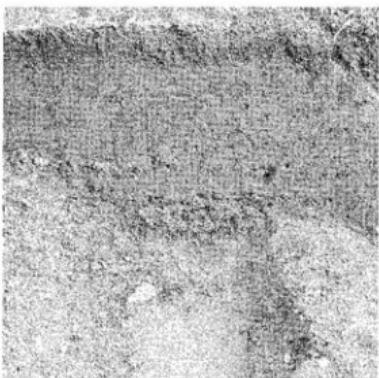
(2) 1トレンチ全景（北から）

長岡京跡右京第728次調査

図版二



(1) 1トレンチ断面（西から）



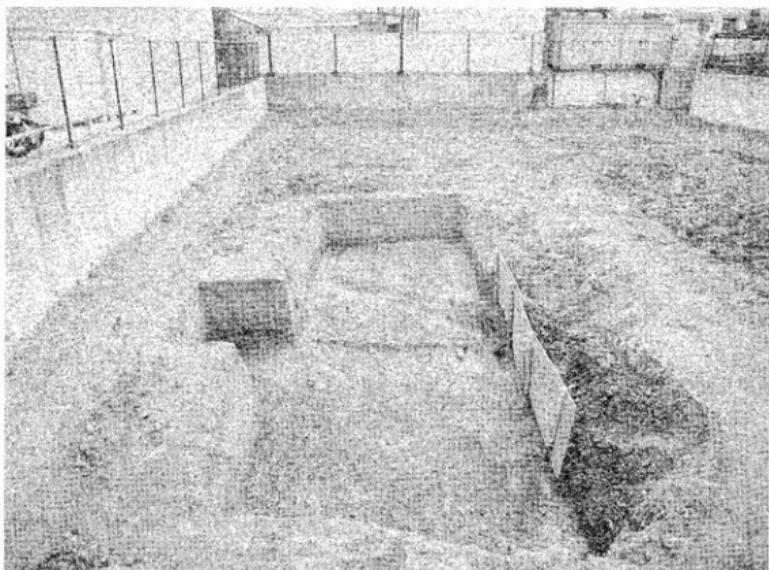
(2) 溝SD01Cの土層（西から）



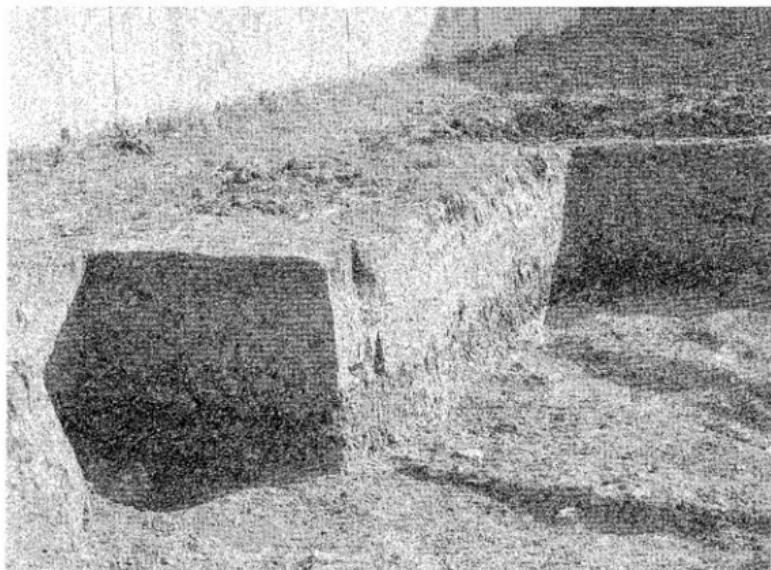
(3) 溝SD01Aの土層（西から）

長岡京跡右京第728次調査

図版三



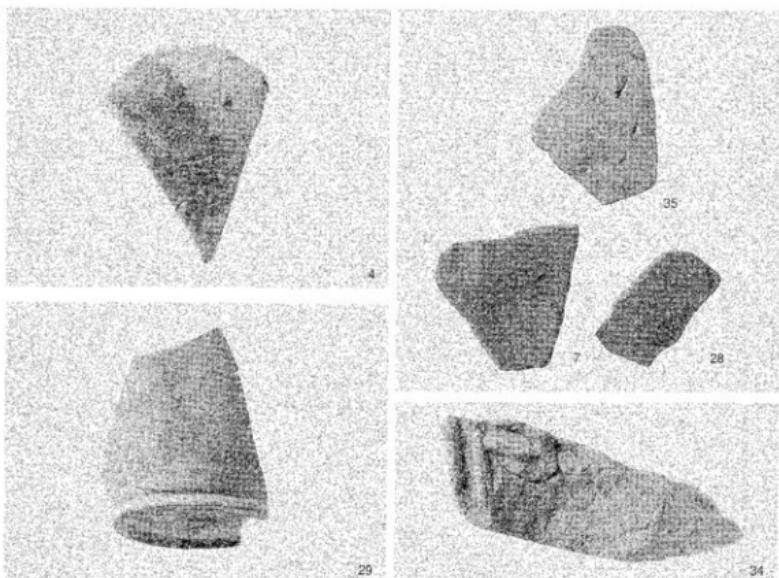
(1) 2トレンチ全景（北から）



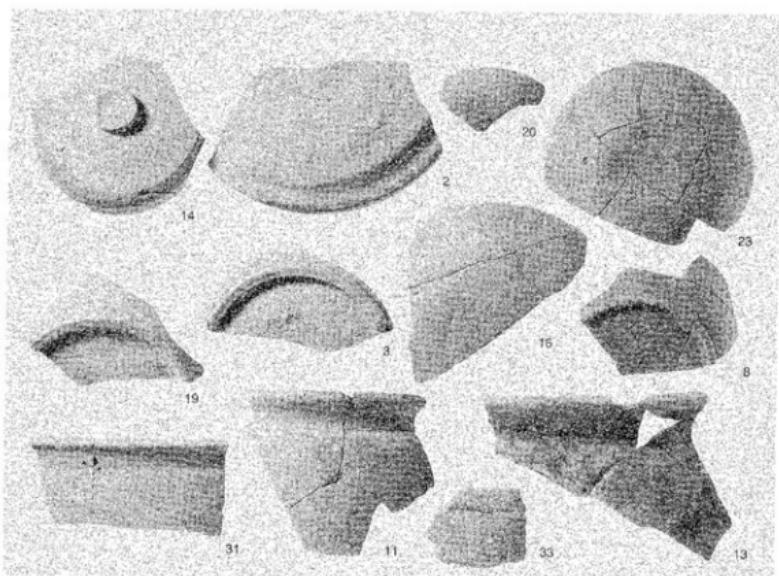
(2) 2トレンチ断面（北西から）

長岡京跡右京第728次調査

図版四



(1) 出土遺物-1



(2) 出土遺物-2

長岡京跡右京第733次調査

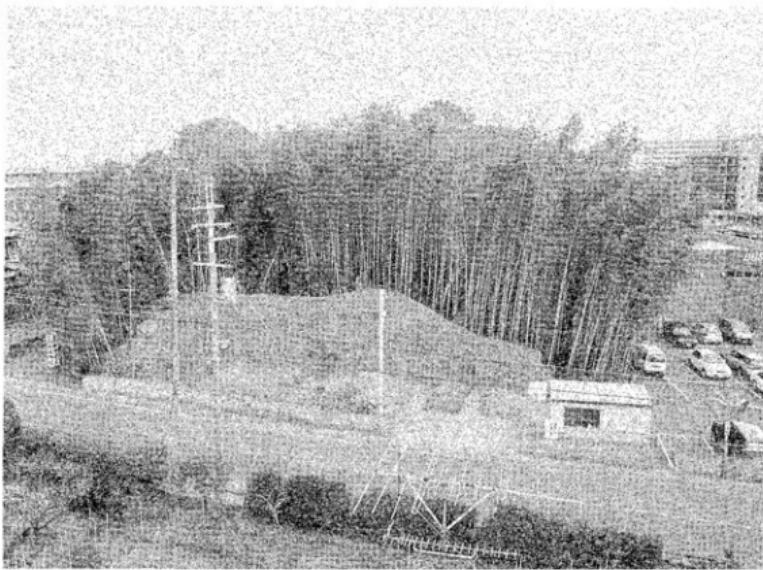
図版五



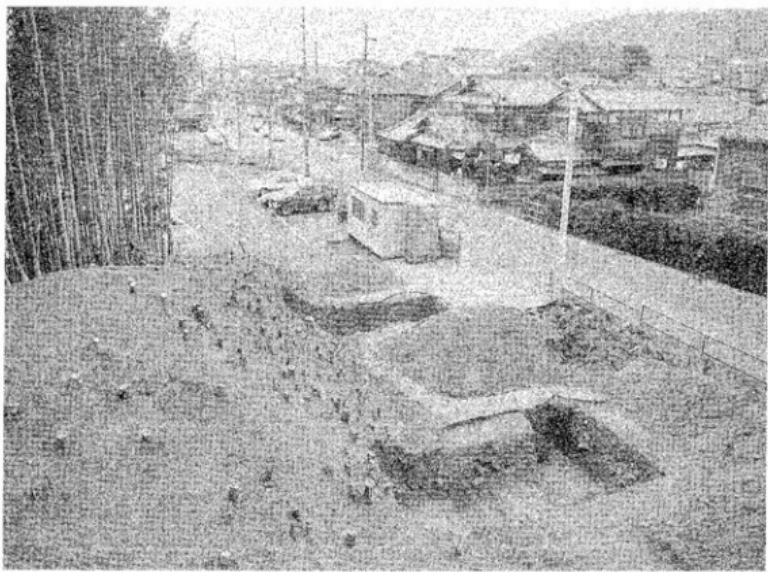
調査地全景（南から）

長岡京跡右京第733次調査

図版
六



(1) 調査地遠景（西から）



(2) 調査地から勝龍寺城本丸、天王山を望む（北東から）

長岡京跡右京第733次調査

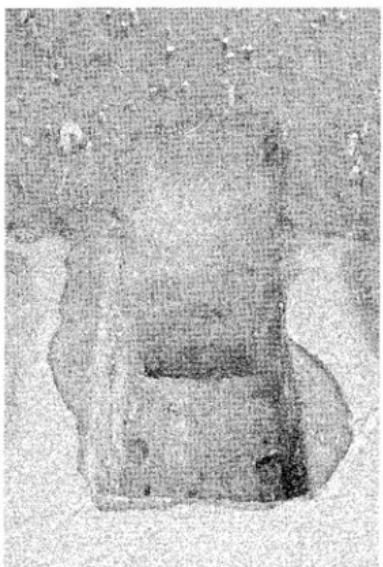
図版七



(1) 北トレンチ全景（西から）



(2) 北トレンチと土壠（南西から）



(3) 南トレンチ全景（西から）



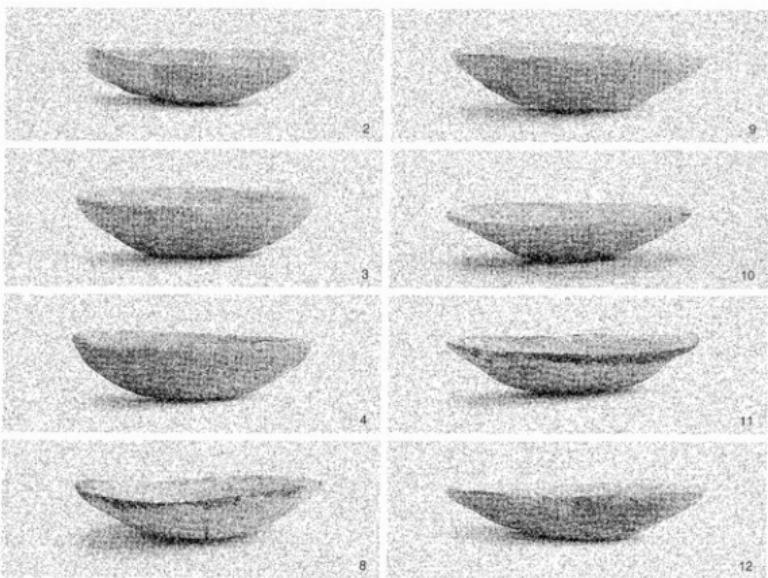
(4) 南トレンチと土壠（南西から）

長岡京跡右京第733次調査

図版八



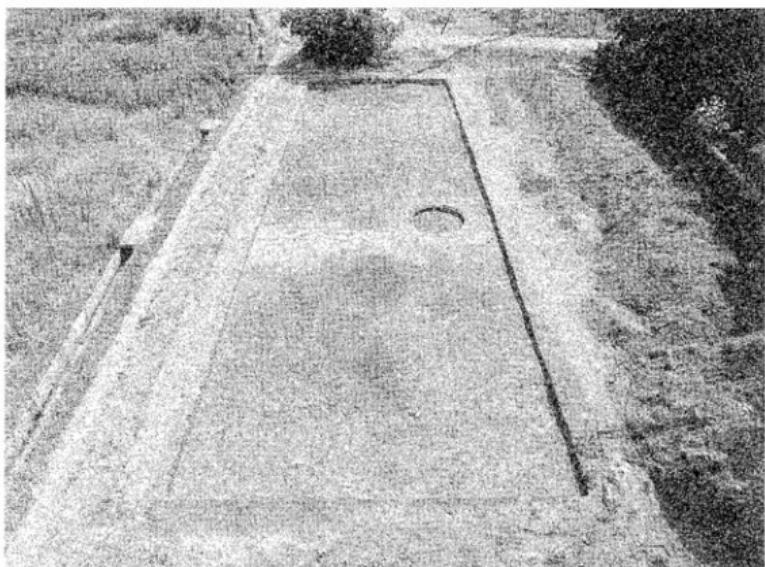
(1) 南トレンチ溝 SD01 (北から)



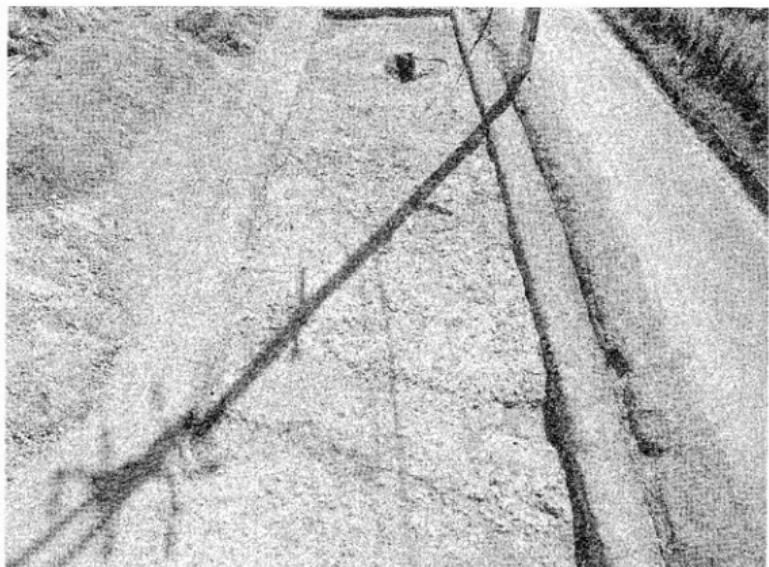
(2) 出土遺物

長岡京跡右京第743次調査

図版九



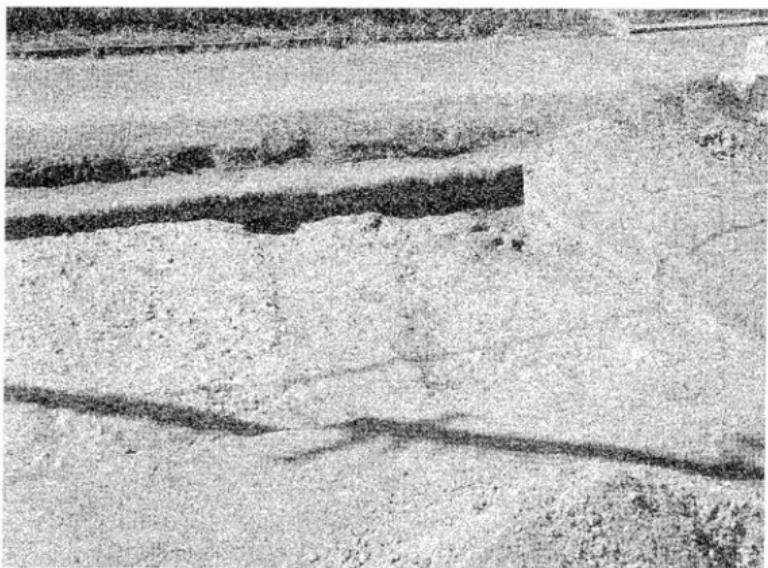
(1) 西調査区全景（南西から）



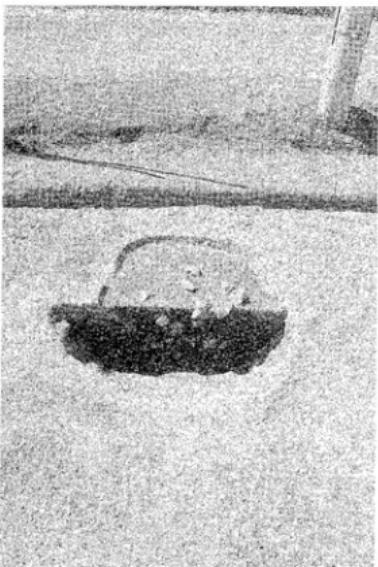
(2) 東調査区全景（北東から）

長岡京跡右京第743次調査

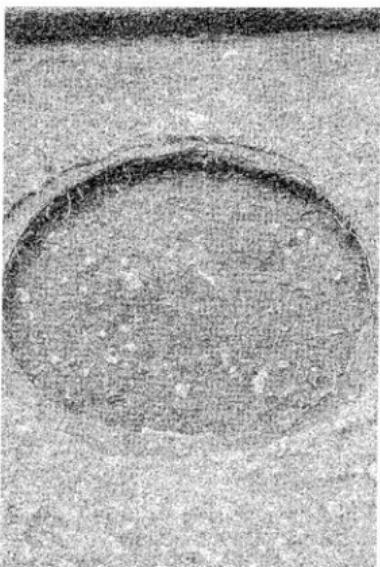
図版
一
〇



(1) 落ち込み SX05 (南から)



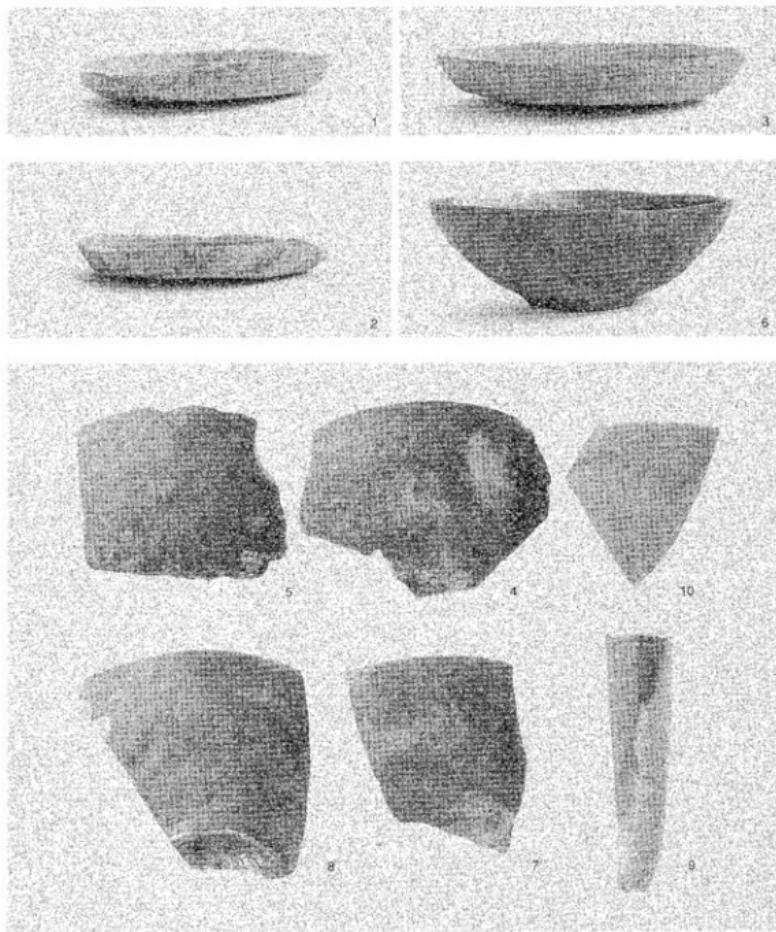
(2) 土坑 SK04 (南東から)



(3) 野井戸 SE01 (北西から)

長岡京跡右京第743次調査

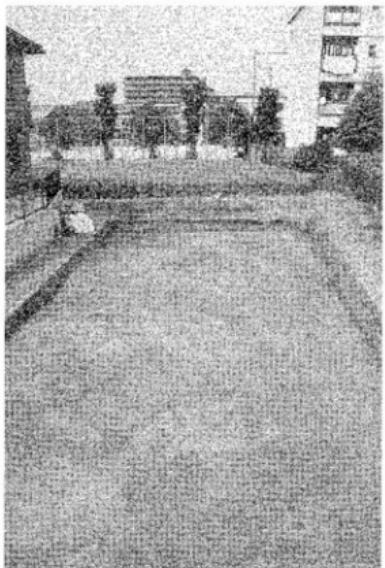
図版一



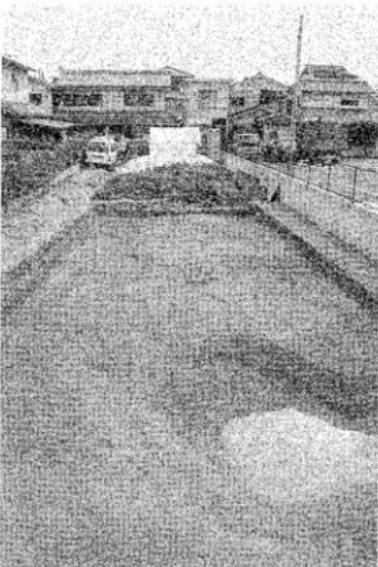
出土遺物

長岡京跡右京第747次調査

図版
一一



(1) 北調査区全景（南から）



(2) 北調査区全景（北から）



(3) 南調査区全景（南から）



(4) 土坑SK04・溝SD05（南西から）

長岡京跡右京第765次調査

図版
一
三



(1) 調査区全景（北西から）



(2) 拡張区全景（西から）

長岡京市文化財調査報告書 第45冊

平成15（2003）年3月25日 印刷

平成15（2003）年3月28日 発行

編 集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0826 京都府長岡京市開田一丁目1番1号

電話 075-951-2121㈹ FAX 075-951-8400